



Data

監督: ミヒャエル・ハネケ

出演: /イザベル・ユペール/ジャンニルイ・トランティニャン
/マチュー・カソヴィッツロ
/トビー・ジョーンズ/フランツ・ロゴフスキ /ローラ・ファーリンデン/ファンティヌ・アルドゥアン/
ハッサム・ガンシー/ナビア・アッカリ

■■■ショートコメント■■■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

「なぜ、やった?」「何を」

85歳の祖父と、13歳の孫娘。

ふたりを惹きつける大きな“秘密”。

ハネケ監督がわたしたちに問いかける問題作。

『白いリボン』と『愛、アムール』で二度にわたって、カンヌ国際映画祭の最高賞パルムドールに輝いた名匠ミヒャエル・ハネケ。『愛、アムール』では老境の夫婦ジョルジュとアンヌの愛と死に透明な視線を投げかけ、アカデミー賞外国語映画賞を受賞した。

それから5年、昨年のカンヌ映画祭を衝撃の渦に巻き込んだ『ハッピーエンド』では、フランスの移民問題を象徴する街カレーの瀟洒な邸宅に住まうロラン家を背景に、『愛、アムール』の続きともとれる、新たな愛と死を衝撃的に描く。

ハネケは祖父ジョルジュと疎遠だった孫娘エヴの再会に光を当てる。幼い頃父に捨てられ、愛に飢え、死とSNSの間に取り憑かれたエヴの閉ざされた扉を、ジョルジュの衝撃の告白がこじ開ける。『ハッピーエンド』は、現代のヨーロッパに“教養あるブルジョワジーはもはや存在しない”ことを炙り出しながら、ディスコミュニケーションの闇が広がる今、孤独な魂の会合が漸絶した絆に血が通う瞬間に観客を立ち会わせる。

ジャン＝ルイ・トランティニャン、イザベル・ユペール 屈指の実力を持つ名優たち

祖父ジョルジュを演じるのは『愛、アムール』の名優ジャン＝ルイ・トランティニャン。ジョルジュの娘役には、『ピアニスト』はじめ、ハネケ作品では常連のイザベル・ユペール。昨年『エル ELLL』でオスカー主演女優賞にもノミネートされ、乗りに乗るユペールがビジネスマンとして辣腕を振るう一方で、エゴイスティックな現代ブルジョワの姿を体現してみせる。トランティニャンとユペールが前作に続いて父と娘を演じるのも見逃せない。ほか、マチュー・カソヴィッツ、トビー・ジョーンズら、ヨーロッパ屈指の実力俳優の饗宴に、ハネケによって抜擢されたファンティヌ・アルドゥアンがヒロインとして加わった。

◆公式ホームページによれば、本作の「ストーリー」は次の通りだ。

カレーに住むブルジョワジーのロラン家は、瀟洒な邸宅に3世帯が暮らす。その家長は、建築業を営んでいたジョルジュ（ジャン＝ルイ・トランティニャン）だが、高齢の彼はすでに引退している。娘アンヌ（イザベル・ユペール）が家業を継ぎ、取引先銀行の顧問弁護士を恋人に、ビジネスで辣腕を振っている。専務職を任されたアンヌの息子ピエール（フランツ・ログフスキ）はビジネスマンに徹しきれない。使用人や移民労働者の扱いに関しても、祖父や母の世代への反撥があるものの、子供染みた反抗しかできないナイーブな青年だ。またアンヌの弟トマ（マチュー・カソヴィッツ）は家業を継がず、医師として働き、再婚した若い妻アナイス（ローラ・ファーリンデン）との間に幼い息子ポールがいる。その他、幼い娘のいるモロッコ人のラシッドと妻ジャミラが住み込みで一家に仕えている。

一家は、同じテーブルを囲み、食事をしても、それぞれの思いには無関心。SNSやメールに個々の秘密や鬱憤を打ち込むだけ。ましてや使用人や移民のことなど眼中にない。そんな家族の中、ハネケは祖父ジョルジュと疎遠だった孫娘エヴ（ファンティヌ・アルドゥアン）の再会に光を当てる。老いた祖父は、意に添われぬ場面ではボケたふりをして周囲を煙に巻きながら、死の影を纏うエヴのことも実はちゃんとお見通し。一方、幼い頃に父に捨てられ、愛に飢え、死に取り憑かれたエヴもまた醒めた目で世界を見つめている。秘密を抱えた二人の緊張感漲る対峙。ジョルジュの衝撃の告白は、エヴの閉ざされた扉をこじ開ける――

◆『愛、アムール』（12年）も80歳超の老人夫婦の物語で、見ているとちよっとしんどかった（『シネマルーム30』未掲載）が、その続編のような本作も、85歳の祖父ジョルジュ・ロラン（ジャン＝ルイ・トランティニャン）と13歳の孫娘エヴ（ファンティヌ・アルドゥアン）の2人を軸として展開される、かなり奇妙な物語。したがって、『ハッピーエンド』というタイトルとは裏腹の、かなりうっとうしい物語（？）になっている。

◆ジョルジュは建設業で財をなしたロラン家の家長だが、今は車椅子生活。家業を継いだ娘のアンヌ・ロラン（イザベル・ユペール）が今は辣腕を振るっているようだが、冒頭、建設現場で「ある事故」が発生したから、大変！また、アンヌの息子ピエール・ロラン（フランツ・ロゴフスキ）は3代目特有のひ弱さ（？）を見せつけているから、この親子関係も大変だ。このようにロラン家は終体として家族は多いものの、それぞれ問題を抱えているらしい。その中でも、幼い頃に父に捨てられた孫娘のエヴは愛に飢え、死にとりつかれていたから、かわいい顔に似合わず自殺未遂までも…。

◆本作は、スクリーンの真ん中部分に縦長のスマホの画面を映し出し、そこで「ある日常生活」が「実況中継」をされるシーンから始まるが、こりゃ一体ナニ？『白いリボン』（09年）で第62回カンヌ映画祭パルム・ドール賞を受賞したミヒヤエル・ハケネ監督も、少しボケてきたの？つい、私はそう思ってしまったが、さてあなたは？本作は賛否両論が極端に分かれる映画だが、私はかなり否定的…。

2018（平成30）年2月14日記